**隠れている大変動 2017 07 30**

**マタイ 13:31-33, 44-52 スティンストラ牧師**

先々週と先週、私たちはマタイ13章からイエスの天の国のたとえ話として、一人の農夫によるあきらかに無謀とも思える農業の手法を聞き楽しんだ。イエスはおそらく当時の田舎社会に生活する多くの人々に対して、なじみのある農業のたとえを用いることによって、よく知られていない真理を教えることができたのだろう。しかしながら、イエスの手法はすべての人々に理解されたわけではない。田舎とはいえ、居住者のなかには農地の仕事にはかかわっていない人々もいて、彼等の理解には限界があった。旅をまったくしたことが無い人に向かって「結婚は長い旅路です」とか、あるいは羽毛でくすぐられたことが無い人に「昨日の風は鳩の羽のようだった」と言っても、ピンとこないのである。そこで、マタイ13章の終盤では、漁民やパン焼き職人あるいは商人たちにも意味があるものになることを期待して、イエスはさらにいくつかの神の統治を描写するたとえ話をしている。それはあたかも、「もっと天の国の特異性について話してください。私のような者でも、天の国が平静なるこの世に予告も無く入り込んできて、通常だった社会と衝突を起こし、そしてすべてを並べ替えてしまう様子をいったいどう描写できるのですか？」と質問してくる人に対して、丁寧に説明してあげているような感じである。

といってもイエスは、知りたがりやの隣人たちにはすでに話をしたあの賢いとは思えない農夫についてもうひとつの逸話を話してからでないと次には進めなかった。つまりあの農夫が何かすばらしいものを育てることができることをわかってもらうために、今回は町の笑いぐさになった地主がほんの小さな一粒のからしだねを土の中に植えることで、大きな木に育つという話をする。村人たちはこの愚かそうな農夫に関して首をかしげながら、小さなからし種をどれほど成長させることができるかわかっていなかったことをだれもが認めることになる。この逸話を聞く前は、村人たちの目には、主人自身も悪人たちと同じようにとても怠慢な男で、悪人にのことなどは気にしないような、どうでもいい農家の主人にしか見えなかったが、いまや話は異なってきた。この農夫の植えたからし種がひとたび根をはると土地はしっかりとしてきて、そして正しく栽培されるなら鳥が来て巣を作れるほどの大きな木に成長することがわかったから。

この必然的な結果は、種を蒔く人の予定していたことではないが、町の人々だれにとっても、もうひとつの笑い種となった。しかしながら、それと同時にこの話は神の国のもうひとつの面を表現している。イエスは天の統治が、まさにからし種が成長するように、賢くこの世の中に浸透してきていることを示唆している。まるで自分で自分の足を打ってしまうような笑い出したくなるようなことだが、よく注意深く観察するならば、最初はなんの変哲もないようなことから、偉大なことが必ず起こることが明らかなのだ。新しい時代とは小さく始まるが、皆さんの中でまた皆さんとともに、古い時代が完全に新しい時代となってしまうまで、成長して大きくなり、どんどん良くなって行く。
現代の社会状況に満足している人間にとっても、今日の２番目のたとえ話から似たような挑戦を受けることになる。そのたとえ話とは、女が小麦粉に隠したパン種の話だ。残念ながら週報の中に記載された無難な翻訳では、”mixed:混ぜた”という言葉になっているが、これではもともとの意味・インパクトを損なってしまっている。もともとのギリシャ語の言葉では、女はこそこそと行っているという意味をもっており、それは登場人物がなにか内密にスパイ行為でも行うように、全体をすっかり変えてしまうような検出不可能なウィルスを秘かに植え込んでいるのだ。イエスの話を聞いているパン職人には、パン生地にイーストを入れるということは毎日行っていることなのに、それがレーダーの監視下での破壊行為かのごとくに取り扱われることで、少々笑い出してしまいそうな話になってくる。しかし、話の中では控えめに立っている女性の姿をじっくり考えると、その女性は手に残った小麦粉を振り落として静かに喜びながら自分自身に「何が隠れているかだれもわからない」とささやいているかのようなのだ。そして、もっとも賢い人でさえも神の国がこのような大変革を起こすことのできる力あるイースト菌のようなものであることに気づかない。　たとえこれが人々の見えないところで起こっていても、社会的には影響力があって高揚させてくれることだ。　ただ平坦でつまらない世の中は、まぜこぜになって劇的に再形成されていき、通常に起こっていることの上に、変化がそびえあがってくる。隠れていた大変動が植えられていくなか中ですばらしい未来が生まれつつあり、現状は同じ状態のまま存続することはできなくなる。

そして最後のたとえ話では、イエスは天の国とは海の中に投げ込まれていっさい分け隔てをせずにすべての魚を捕らえる網のごとくであると話す。魚とりをしている神は、なにが捕獲されようがかまわないのである。神はすべてを捕らえたいのである。　神は本当にすべての者を平等に愛しており、後に分ける作業をすれば良いと本当に思っているのだろうか？　あまりにも気前良くて浪費とすら見られかねない状況は、あの種をそこら中に撒き散らす思慮に欠けた種を蒔く人のようでもある。食べられるだけの良い魚を取るでけではなく、肥料にする価値もあるのかどうかわからないような魚まで、なんで全部の魚を捕獲しようとするのだろうか？　食べられないような魚をとったところで、おいしい料理法はあるのだろうか？

そこには真理がありそうだ。イエスの語る約束では最後にはよくなるのである。最後の笑みは神に帰属しているのである！　イエスにおいてこの世に入り込んだ神の国は、私たちがどう天の父が働かれるのか、神の子となる資格はなんなのか、とった概念について再考を迫ってくる。わたしたちがよくわからないうちに捕らえられ、私たちにはなにもできないそしてわれわれのゆがめられた基準の中では少々やっかいな新しい時代に引きずりこまれる。イエスが約束していることは、究極的には（天の国には）人間の価値システムは存在しないということである。教会が最初に出来た日に現れたものでもなければ、いまわかったことでもない。なにか神の言葉が再形成されて肉体となったこと以上のことである。神は今も教会に現れてストーリーを語ってくださる。私たちが一度は順当なことだと考えてしまった道だが、その道では決して悲しいかな神しかわかることができない神の真理に近づけないという不条理がある。イエスの語ってくださる話によって、そのような不条理な概念にストップがかかる。　われわれが真の喜びを欲するのであれば、しばしばだれかの浪費を笑うのではなく、わたしたち自身がもっと時間を費やして神が言わんとすることを聞かなければならない。　アーメン